

大森めぐみ教会 教会講座 第1回 テーマ「なぜ、聖書のみなのか」
2021・6・13 関川泰寛

わたしたちのプロテスタント教会は、宗教改革の出発点に「聖書のみ」を掲げたことはよく知られています。「聖書のみ」とは、聖書のみが、信仰や教会の教理の規範であり、それ以外のものを規範としないということを意味しています。

つまり、ローマ教皇の権威や、教会の伝統、しきたり、影響力のある教会員の言動、聖書以外の思想やイデオロギー、人間の良心や善意、特定の政治制度（例えば民主主義のルールなど）・・・そういうものが、信仰や教会の教理の規範にはならないということです。

宗教改革者が生きていた16世紀には、ローマ・カトリック教会が社会を支配し、聖書以上にローマ・カトリック教会の伝統や教皇を頂点とする聖職者たちの権威が尊ばれ、聖書という規範によって改革されることを拒んでいました。改革者たちは、教会は、唯一の権威である聖書という規範によって、常に改革されるべきだと主張して、具体的な教会改革に乗り出すこととなります。彼らが否定したのは、教皇の権威、聖書よりも教会の伝統が重んじられる過ち、聖餐のパンとブドウ酒が、キリストの血と肉に実体的に変化するという教えなどです。これらは、いずれも聖書には記されていない、この世の教会が作り出した誤謬であるとみなされました。

時代状況は異なりますが、現代のプロテスタント教会にとっても、聖書は唯一の規範です。

聖書が唯一の規範であるとは、旧約39巻、新約27巻、合わせて66巻の聖書全体が、神の霊の働きによって書かれ、人間に与えられた書物であるとの理解に拠っています。テモテ(二)3章16節には、「聖書はすべて神の霊の導きの下に書かれ、人を教え、戒め、誤りを正し、義に導く訓練をするうえに有益です」と書かれています。聖書全体が、神の靈感によって書かれたゆえに、聖書は他に並ぶものがない規範なのだという考え方です。このような考え方は、古代から宗教改革、そして現代のプロテスタント教会に一貫した理解です。

わたしたちの教会も、「聖書のみ」という立場から、教会のあり方、礼拝の内容などすべてを形作っています。礼拝では、旧約と新約が読まれ、説教がなされます。聖書の研究が常に教会で行われ、教会員は聖書を読み、その言葉に慣れ親しみ、聖書から命をいただきます。礼拝の説教は、聖書朗読から始まり、朗読した聖書を神の言葉として語り伝える営みです。洗礼と聖餐という聖礼典もまた、聖書にしろされた外的な恵みの出来事です。説教が語られ、聖礼典が正しく行われるところに、真の教会が立ちます。

聖書の規範性は、聖書のみが、父なる神と御子イエス・キリスト、そして聖霊なる神を証言するゆえに、三位一体の神の証言を排他的にもたらします。三位一体の神への証言を行う歴史的な文書は、聖書以外には存在しません。そこで、聖書の規範性に導かれて、父と子と聖霊なる神を讃美頌栄する言葉として、古代教会の諸信条、宗教改革時代の信仰告白が、教会の伝統として重んじられます。伝統は、あくまで、聖書という規範に規範される規範であり、聖書を凌ぐものではありません。しかし、プロテスタント教会は、伝統概念を信仰告白に特定し、時代時代によって、信仰告白を作成し、新たに告白する営みを止めることはありませんでした。ルター派も改革派も、この点では同じです。

かくして、宗教改革こそは、諸信仰告白が生み出され、それが信仰の養育にも用いられ、カテキズム教育に生かされるようになります。わたしたちも、同じ伝統を受け継いでいることは確かです。

そこで「聖書のみ」とは、信仰告白などの教会の諸伝統を排除する「聖書主義」とは異なります。聖書が聖書として読まれ、聴かれるために、聖書以外のものに権威を認めない教会の姿勢が、「聖書のみ」という言葉には現れています。